【解説文】保育心理士資格取得講座

カウンセリング演習２

仁愛大学大学院　心理学研究科　特任教授
同朋大学　名誉教授／客員教授
保育心理士（一種)、臨床心理士、公認心理師
目黒　達哉

「カウンセリング演習２」では、カウンセリング概論を基礎として、保育心理士（一種）資格取得をしようと思った動機について確認する。

１．動機は何か？

・なぜ保育者になろうと思ったのか？
・なぜ保育心理士の資格を取得するのか？
・なぜ私たちは生きるのか？
・あなたは、どういう生き方がしたいのか？　＜**社会貢献**＞
・あなたの夢は？

２．原点に立ち返ること

まず、上記のようなテーマで、ロールプレイを行う。受講者の皆さんそれぞれが保育者、保育心理士になろうと思った動機を思い出し、新鮮な気持ちになり、原点に立ち返ることができるようである。保育現場で辛いことやうまくいかないことが起こると動機を忘れがちになってしまう。その動機を呼び起こすためにもこのようなロールプレイは重要である。

次に、カウンセリング概論を基礎として、いくつかの演習を行う。演習を通じて、保育心理士の役割や保護者支援のあり方を学ぶ。

３．保育現場を想定したロールプレイの目標

次に「カウンセリング演習Ⅰ」では保育現場を想定したロールプレイを次のように実施して、受講者の皆さんが、

①保護者、保育心理士の役になりきってみる、
②親の立場になってみる、
③演じてみて何を感じたのか、
④感じたことを分かち合ってみる、

以上４点をロールプレイの目標にしている。

４．保育現場を想定したロールプレイの実際

（1）　保護者からの相談（自閉スペクトラム症を疑う 3 歳児の父）

3歳児の昌史くんは、周囲の人に関心を示さない。集団行動ができない。
運動会の時も終始泣き叫び、手足をバタバタさせ、かけっこに参加できない状態で、担任、父親、母親がかわるがわる抱いていないといられない状態であった。
両親は、2歳頃から姉（本児の姉5歳）と比較してみると、何かおかしいと感じ始めていた。
このような状況の中で、父親は担任に相談を持ちかけた。
父親面接には、保育心理士有資格者である担任があたった。

保心士：「こんにちは。先日の運動会はご苦労さまでした。ありがとうございました。」
父親：「こちらこそ、先生方にはたいへんご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。」
保心士：「いいえ。お父さんも、お母さんもたいへんでしたね。」
父親：「先生方も、もうお気づきだと思いますが、うちに昌史は、ちょっとおかしいのではないかと思うのです。私も少し本などで勉強したのですが、昌史は自閉症では？と思うのです。一度、医者に診てもらった方がよいのでしょうか？」
保心士：「　　」

※　この続きを演じてみましょう。

＜解説＞

さて、皆さんは、この後、どうのように演じるか。ロールプレイは、恥ずかしがらず、その役になりきってみる、演じきってみることが重要である。そして、可能な限

り演じ続けることだ。最初は照れ臭く笑ってしまうかもしれないがそれでもやり続けることである。

ところで、実際の講座のロールプレイ後の振り返りでは、いつもいろんな意見が出て、討論し合う。そして、各役割の心理状態、保育心理士の役割、保育現場での対応のあり方が見えて来る。

このロールプレイ後の振り返りでは、次のようなことが出てくる。

・父親は熱心であるが、母親はどうしているのであろう。母親は運動会での子どもの様子を見て家でふさぎ込んでいるのか、あるいは父親に任せているのか。

・父親だけが出かけてくるのは珍しいのではないか、母親に何かあるのではないか。

・父親が「医者に診てもらった方がよいでしょうか？」と保育心理士に問いかけているが、即答はせずに、父親に寄り添う感じで話に耳を傾けていき、最終的に父親が決断していけるように支援ことが重要ではないか。まずは、一般的な保健センターのような機関を紹介するのもよいのではないか。

・母親に何かあるかも知れないので、父親に母親を気遣うような気持ちで、「お母さんはどうされていますか？」と聞いて見てもよいのではないか。

このようにロールプレイ後の振り返りで出されるいくつかの例を紹介したが、様々な角度から事例を検討することができ、登場人物の心理的背景を深めることができる。

（2）クレーマーの親

5歳児の夏子ちゃんは、園庭のブランコで遊んでいる際に、誤ってブランコから落ちてしまい、右腕を痛めてしまった。

夏子ちゃんは泣いて痛がるので、担任は夏子ちゃんを病院へ連れていき、同時に母親にも連絡した。母親も病院に駆けつけた。幸い骨折はしていなかった。担任は「申し訳ありません」といったが、母親は不服そうな顔をしていた。

翌日、突然、母親は園を訪れ、担任が対応するが「園長を出せ！」とくってかかってきた。

園長と担任で対応する。

園長：「昨日は、申し訳ありませんでした。お母さんにお会いしてお話したいと思っていたところでした。」

担任：「私がついていながら・・・・・・・・」

母親：「うちの夏子はね。ケガする子じゃないですよ。園の遊具がおかしのではないですか？ちゃんと手入れをしているのでしょうね？」

園長：「　　」

※　この続きを演じてみましょう！

＜解説＞

さて、この後を演じてみよう。どのような展開になるでしょうか。

演習後の振り返りで討論される課題をあげて、保護者の心理状態、また園長、保育

心理士の役割について考えてみたい。

振り返りでよく出てくる話題は、次のようなものがある。

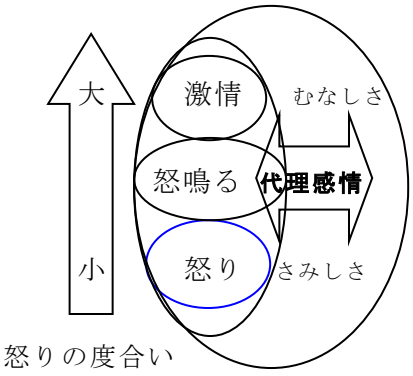
・園長は動じないで、毅然とした態度で、母親と接した方がいい。

・園長、保育心理士が謝罪するとしても「申し訳ありませんでした。」の 1 回のみである。

・園長、保育心理士は、母親に迎合しない。

・園長、保育心理士は、母親の怒りの感情を受容する。園長と保育心理士が受容的態度で母親に向き合うことによって、母親の怒りの感情が薄らいでいくだろう。そうしたらいっしょにこのような問題が二度と起こらないように共に考えていく姿勢を取る。

ところで、ここで、クレーマーの母親の心理状態について、交流分析理論の「ラケット（代理感情）」を援用して説明したい（図１）。しかし、この考え方は一つの見方であって万能ではないことを申し添えておきたい。



交流分析理論

「ラケット（代理感情）」の援用

図１　クレーマーの心理

この事例の母親はおそらく人間がもっている喜怒哀楽の感情の中で、「怒り」の感情が強いと考えられる。筆者は、「怒り」の感情にも段階があると考えている。最初のレベルは、ふつふつとした「怒り」である。これはまだ冷静な状態である。次のレベルは「怒鳴る（ふざけんな！バカヤロウ！！）」で周囲の人は恐怖を感じる。最高のレベルは「激情」である。「激情」の状態は、物を投げる、蹴るなど荒れ狂う状態である。一歩間違えば警察沙汰になるであろう。筆者の経験からすると、「怒鳴る」にしても、「激情」にしてもスイッチが ON から 1 時間も 2 時間も続かない。怒りのエネルギーは非常にパワーがあり、せいぜい 10 分から 15 分ほどであろう。10 分から 15 分ほどすると、スイッチが OFF となって我に返るのである。相手が怒鳴っている最中や激情中に、こちらが何かいうと、火に油を注ぐようなもので、さらにヒートアップする。であるから、冷静に母親を受容する態度で接する必要があろう。

実は、この「怒り」の感情の背景には、「むなしさ」や「さみしさ」といった感情がある。この感情に触れまいと去勢を張ったような状態になる。そうなると「怒り」

の感情が前面に出ると考えられる。クレーマーの背景には、「むなしい」「さみしい」といった心理状態である。これを「ラケット（代理感情）」といっている（図 1）。なぜこのような人格を形成するのかというと、この母親自身、周囲から承認された経験が少ないと考えられる。特に自分の両親から認められて育っていないと思われる。

この事例の母親は、「ふつふつとした怒り」から「怒鳴る」という心理状態であったと考えられる。このような事例の場合、園長、保育心理士は、母親の背景を感じながら、大きな器となって、母親の話に耳を傾け、母親を受容することが重要であろう。これを受容性という。保育心理士は経験を積むことによって受容性を高められるであろう。

（3）虐待が疑われる保護者

最近、園において、4歳児の達子ちゃんの身体に「あざ」があることに担任が気づく。担任は不審に思い、園長と主任に相談し、母親に来園してもらうよう連絡をする。母親は来園を拒否しなかった。

母親来園。保育心理士（以下、保心士と記す）と面接することになった。

母親：「何かありましたか？」
保心士：「達子ちゃんのことで、ちょっと気になることがありまして。
お母さん、子育てで何か悩んでいることや困っていることは
ありませんか？」
母親：「困っていることなどありません。そんなことより、先生が気になることって
何ですか？」
保心士：「あの・・・・。　実は、・・・あざが・・・・・。」
母親：「　　」

※　この続きを演じてみてください。
2パターンを演じてみましょう。
一つは、泣き崩れて、その後素直に悩みを話す場合です。
もう一つは、虐待を疑われてキレる母親です。

＜解説＞

心理ゲーム　～虐待の心理的メカニズム～

筆者は、人は誰しもこの世に生まれ、人のお役に立ちたい、人の喜ぶを見たいといった気持ちを持っていると思う。

また、人には生まれてから死ぬまで「支援者」であり続けたいという深層心理が存在していると考えられる。

しかし、人間は完全ではなく、心理ゲームに突入する。

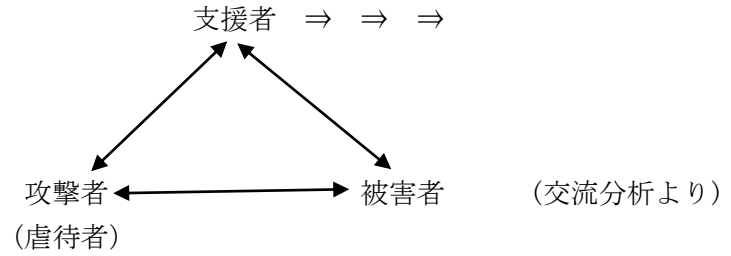


図２　虐待の心理的メカニズム

母親は子どもの支援者としてあり続けたいと思うが、さまざまな要因が絡み、子どもを虐待（攻撃者）したり、子どもの被害者になったりする（図２）。

（４）コンサルテーションの事例

登園拒否園児の家庭訪問がうまくいかない事例

【年長 A 君】　：　５月 GW 明けから断続的に登園拒否　（良い子、集団不適応気味）
＜担任＞：　このままだと小学校に入学してもいけなくなるのではないか、
早く何とかしなくてはと家庭訪問を繰り返す
家庭訪問時の様子　：　A 君は部屋から出てこない、担任は母親と話す。
家庭訪問しても担任と会えない。母親も担任に話すことがなくなる。
母親は部屋から出て来ない A 君を責めるようになる。

コンサルテーションの事例として考えてみましょう！

コンサルタント：保育心理士　―　コンサルティ：保育士（担任）

＜解説＞

【支援の方法（例）】

- 担任（保育士）　⇒保育心理士に相談する（コンサルテーション）
⇒A 君への間接的な援助になる
- 保護者　⇒保育心理士に繋ぐ　⇒A 君への間接的な援助になる

A 君を見守る姿勢
A 君の行動を待つ姿勢
（直接的援助ができるまで待つ姿勢）

５. 保護者支援について

保護者支援では、「**いかに保護者を子どもの良き援助者とするか。**」ということが重要な

テーマだと考えられる。

「三つ子の魂百まで」「親の背を見て子は育つ」「子は親を映す鏡」というように、子どもは親の影響を強く受ける。

このことに関連して、神田（2002）は、「子どもへの心理的援助を行う場合、どうしてもその家族のあり様を考慮しなければならない。子どもは親の中心とした周囲の環境との相互作用において成長していくのであるから、それだけ家族の構造や機能が子どものパーソナリティ形成に影響を及ぼし、それが日常生活での行動にも如実に反映されることになる。」、そして、「子どもに問題行動が現れた場合、その子への治療的アプローチとともに、親（主たる養育者は母親であることが多い）の性格や養育態度、それに親子関係そのものに焦点を当て、改善のための働きかけをしていくことは必要不可欠であり、これなくしては問題の解決は望めない。」と述べている。

＜引用・参考文献＞

H.カーションバウム　V.L.（編著）（伊東博・村山正治監訳）（2001）．ロジャーズ全集上下　誠信書房

池田勝昭・目黒達哉（共編著）（2007）．　障害者の心理・『こころ』　―育ち・成長・かかわり―　学術図書出版社.

池田勝昭・目黒達哉（共編著）（2010）．　こころのケア　―臨床心理学的アプローチ―　学術図書出版社.

神田久男（2022）．　「3　子どもの問題行動　（2）家庭生活での問題行動」『現代の臨床心理学』学術図書出版社　ｐｐ51-61.

南山短期大学人間関係学科監修　津村俊充・山口真人（編著）（1992）.人間関係トレーニング　ナカニシヤ出版.

中村元・福永光司・田村芳朗・今野達（編）（1989）岩波仏教辞典　岩波書店.

大下大圓 編著（2014）.『実践的スピリチュアルケアーナースの生き方を変える“自利利他”のこころ』
日本看護協会出版.

佐治守夫・飯長喜一郎（編著）（1983）．　ロジャーズ　クライエント中心療法　―カウンセリングの核心を学ぶ―　有斐閣新書.

杉田峰康（1990）．講座・サイコセラピー第８巻『交流分析』　日本文化科学社.

杉田峰康（1991）．交流分析のすすめ―人間関係に悩むあなたへ　日本文化科学社.

田代俊孝（2025）．◆ソウルメイキングキャンパス＊仁愛◆ あなたに贈る言葉'25　―美しい世を拓く灯となるために―　仁愛大学.